# 鏡の顔

## 1

ドイツ製の車は広尾と六本木を結ぶ交差点を越え、青山墓地を一気に通過した。初夏の陽が並木の葉を射抜き、シルバーの車体で反射する。前日の雨がアスファルトに黒く沈んだ細い道をサードで駆けぬける、その輝きを美しいと感じる者なら、その車の価値を認めるかもしれない。車名は誰でも知っている。そして、数字で表わされる性能についても、大多数は具体的な数字を思いうかべることができなくとも知ってはいる。

万一、車とそれが持つパワーに魅力を感じている者ならば、彼らはタイヤを見、車に備えられた付属品を見る。次に興味を抱くのは、自分とその車の距離である。空間的な意味ではない。時間的、あるいは経済的な距離である。そして、それに関する結論が彼の頭で出た頃、当の車はそこから遥か空間的な距離をひろげている。

運転者に興味を感じている暇はない。

そのポルシェは南青山の小さく茶色い建物の地下にすべりこんだ。





ポルシェの運転者は、地下の駐車場でその技術をかいま見せた。尤も、見ている者はない。大胆さと繊細さを兼ね備えた動きを車は示し、ぎりぎりのスペースに入りこんだ。そうやって止められた車は、駐車状態を見ても実にさりげない。実際、技術の未熟な者が同じ位置に同じサイズの車をはめこもうと試みて初めて、その技術を知ることになる。

白のTシャツにコーデュロイの細身のパンツ、表側は赤のリバーシブルのスイングトップを左脇にかかえた男が降りた。

やわらかそうな髪はそう長くない。だがきちんと整えられておらず、額に下がった前髪が不自然だった。十分な睡眠を得ていない目は赤く充血し、黒い隈がふちどっている。額からつながった鼻梁は形よく盛りあがり、結んだ口元から両頬にかけてびっしりとヒゲがのびていた。

一週間近く、髪を整えることも顔をあたることもできない厳しい状態に置かれていたかのようだ。男はロックせずにドアを閉めると駐車場のエレベーターにむかった。

足取りは決して軽くはない。しかし無駄のない動きだった。

背はそれほど高くはない。それだけが男の疲労した雰囲気に不釣合な、汚れのない真っ白のTシャツに包まれた上半身には贅肉を示すふくらみはなかった。

箱の中に乗りこんだ男は目的階のボタンに触れ背後によりかかった。目を閉じた男を乗せる箱は、心地よい機械音を立てて上昇した。

扉が開くと、男はひっそりとした廊下に歩み出した。赤褐色のカーペットと鉢植えが彼

を迎える。廊下の左右には二つずつしか扉はない。そして真正面にひとつ。
そこに向かって歩きながら、男はスイングトップのポケットを探った。爪の根元まで日焼けした指が平たいキイを取り出す。ホルダーのないそのキイには部屋の使用者の個性を感じさせるものは何もなかった。
扉の前で立ち止まると男は白いスティールの板を上から下まで見つめた。それが仕事のような、慣れた、それでいて油断のない目つきだった。
キイをさしこむ。カチリ、と音をたてて錠がはずれた。
部屋の中は白かった。
壁もカーペットも白で統一され、ブラインドからさしこむ昼下りの光線が乱反射している。男は窓に歩み寄ると、ブラインドの羽を押しひろげ、細めた目で建物の周囲を見おろした。指を抜くとブラインドを操作し、閉じる。それから窓辺におかれた観葉植物の葉に、そっと触れた。
白い部屋の中央に、ガラステーブル、幾つかのソファ、そして籐の寝椅子があった。真横には、二百枚近いレコードをおさめたラックとオーディオコンポーネント。男はリビング・ルームから別の部屋につながっている扉に目を向けた。そこで待つものを考え、わずかに躊躇したが、ステレオに歩み寄った。コンポーネントのパワー・スイッチを押すと、パネルに灯りがともる。ラックからカセットテープを一本取り出しデッキに装着した。
トランペットがスピーカーから這い出すと、男は肩の力を抜き、かすかにほほえんだ。





スイングトップを床に落とした。籐椅子に腰をおろし、両掌で顔を包み、動かなかった。しばらくすると体をのばした。
倒された背もたれに彼が横たわったとき、籐椅子は初めてきしんだ。目を閉じ、深呼吸をする。彼にとって、時の流れは曲の流れだった。まぶたの奥に届かぬ日の光は、ブラインドの向こうで徐々に赤みを帯びる。
玄関の扉がゆっくりと開いた。音はなかったが、男は気配を感じた。まぶたが震えた。
濃紺のローブで体を包んだ長身の女が後ろ手で注意深く扉を閉める。ひめやかに、男の意識を乱さぬよう部屋の中に入りこんだ。
女は男から視線をそらさなかった。大きな瞳に暖かさが満ち、口元に優しい笑みがのぞいている。
入口で女はスリッパからそっと足を抜き、素足でカーペットを踏んだ。白地に朱色のペディキュアが浮かぶ。
男の頭の背後まで来て、女は足を止めた。今ではその心地良い香りで、男は女の位置を感じていたが、目を開かなかった。
女はわずかの間、ヒゲに被われたひきしまった面を見おろしていた。それから右手で自分の髪を額の上にかきあげ、おさえたまま腰をかがめた。
唇がふれあう。
男が目を開き、二人は一瞬見つめあった。男の手が女の頬をそっと押しやった。

「鍵をかけなかったのね」
女は笑みを浮かべた。しっとりと湿りけを帯びた低い声だった。低く甘い。
「君が来ると思った」
「鍵をかけなかったのは、あなたが帰ったときにわかったわ」
「面倒だった……」
「私じゃない、別の人が来ても？」
「おそらく」
女は息を抜いた。
「お帰りなさい」
男は返事の代わりに目を閉じた。
「なにか欲しいもの、ある？」
目を開いた男はまぶしげに女を見つめた。女は笑みを浮かべたまま訊いた。
「一週間、十日？」
「わからない。しかし長かった。今度は。だんだん、長くなる。俺には……」
「わたしもよ。独りでいたい？」
「しばらくは」
女は頷いた。
「いいわ、電話して」





この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。